博士論文要旨

論文題名：異文化間交流における文学翻訳の研究―19 世紀後半から 20 世紀初頭の日本とイギリスにおける「忠臣蔵」受容を題材として

立命館大学大学院文学研究科
行動文化情報学専攻博士課程後期課程
カワウチ　ユウコ
川内　有子

本論文は、開国を機に本格的な交流が始まった日本とイギリス間の異文化交流の中で、英語で記述されるようになった赤穂浪人の討ち入り事件に関する物語や伝説（以下「忠臣蔵」とする）が果たした役割や、2 つの異文化の間でやりとりされることによって生じた「忠臣蔵」の持つ意味の変化について、「忠臣蔵」の受容研究の観点から取り組んだものである。作品の価値や意味の決定における享受者の関与を重視した受容理論を踏まえ、本研究では、どのように翻訳されたのかだけでなく、社会においてどのように受け容れられたのかという問いにまで研究の射程を広げ、英訳を通した「忠臣蔵」の受容を日本とイギリスのある種の共同作業として捉えなおすことを目指している。

本論は、大きく 3 つのパートに分けることができる。第 1 章から第 3 章にかけては、イギリス人が自分たちの文化圏にいる読者へ向けて「忠臣蔵」の受容を促した例を扱い、第 4 章と第 5 章では、それに対する日本人の反応と日本国内の「忠臣蔵」の位置づけを反映した英訳を検討する。第 6 章では、再びこれがイギリスでの受容とつながるまでを扱う。第 1 章では、西洋人によって「忠臣蔵」に日本人の国民性を知るための手がかりとしての役割が付与された過程について、開国前後の記述を中心として考察する。第 2 章、第 3 章においては、それぞれ、ミットフォードの *Tales of Old Japan* における記述、ディキンズの『仮名手本忠臣蔵』の英訳を、成立の背景やその反響を用いて分析することによって 1870 年代における「忠臣蔵」の受容の手段、役割、用途の変化について明らかにする。第 4 章では、西洋人による「忠臣蔵」受容に対する日本人の反応と、その日本国内における「忠臣蔵」の位置づけへの影響を考察する。第 5 章では、1894 年に初版が出版され 1911 年に大きな改訂を加えて第 2 版が出版された井上十吉の『仮名手本忠臣蔵』の英訳の成立背景を明らかにすることで、日本が翻訳を通して自覚的に日本文化や国民性を喧伝しようとする過程の具体例を示す。第 6 章では、1915 年に発表されたジョン・メイスフィールドの戯曲 *The Faithful* と、この劇を第 1 次世界大戦の寓意とする解釈が存在した事実から、異質性の象徴であった四十七士がイギリス人にとって自らを仮託できるほどに同質性が見出されるようになっていたことを、日本とイギリス両社会における受容のある種の共同作業の成果として位置づける。